



全国リレーエッセー

京都府

私が二年間の研修の後に外科医として久美浜病院に赴任したのは二〇〇三年でした。一つのへき地医療拠点病院に五年間も居座るのはいささか異質ではありますが、おかげで継続して地域医療に携わることができ、自然と患者さんとの付き合いも長さに比例して深くなるというた趣です。

「人手が欲しい」

赴任当初は患者さんに「初めまして」とあいさつしていたら、間違いありませんでしたが、今ではうかつに「初めまして」を使うと、げげんな顔で「主人がお世話になりました」と返ってきて、恥ずかしい思いをするこ

やはた たけし  
八幡 武司 24期生、2001年卒

京丹後市の最西端にある久美浜病院。13科、一般110床、療養60床を有する



### 京丹後市立久美浜病院

【私の勤務地】京丹後市は2004年に久美浜町など6町が合併して生まれた。人口約6万1000人で、高齢化率32.6%。京都市から北西に約90km離れており、気候的には「弁当忘れても傘忘れるな」といわれる北陸気候に属し、海の幸に恵まれている。

ともあります。  
と、へき地といっても、道路が整備されれば、自分で運走らせれば別の病院を受診することができる若い人は三十分も車を

# 天命知るのはいつの日か

別国だったのでしよう。しかし、この地域では大半の患者さんが、遠くの病院に通院できない、あるいは、したくないのです。ニーズに応えて、急性期から慢性期まで地域密着型の医療を展開するには、外来や手術と同様に訪問診療や褥瘡

（じよくそう）の治療も重要です。必然として仕事量が増え、「人手が欲しい」と医師不足をぼやく日が多くなります。医師の使命は、もちろん患者さんの病気を治し、治療を終了することです。外科医である私にとっては、例えばがん病巣を取り去って再発の心配を無くすことです。しかし、人間の死亡率が100%である以上、患者さんに満足のいく形で天寿を全うしてもらうことが、もう一つの使命なのかもしれません。そのような感じることがありま

す。

## 得がたい経験に

訪問診療で自宅を訪れ、床ずれを診ていた患者さんが、肺炎で内科に入院しました。寝たきりでしたが認知症はなく、非常にはつきりものを言うおばあちゃん、私が診に来るのをいつも楽しみにしてくれていました。入院後は毎日、床ずれを診に病室を訪問しましたが、高齢でもあり肺炎は良くなり数日で亡くなりました。

亡くなられた後に病室を訪れると、介護をしていた娘さんが私に会釈して、おばあちゃんにこう語り掛けてくれました。「最期に大好きな先生に診てもらえてよかったね」。ごくありふれた日常診療の風景ですが、私にとっては得がたい経験のように感じ、自治医大卒業医師として地域医療に従事できることを殊勝にも感謝しました。

三十にして立つ一外科医はまだ感づき多く、天命（地域医療）を知るのはいつの日か。